００５ Cacco

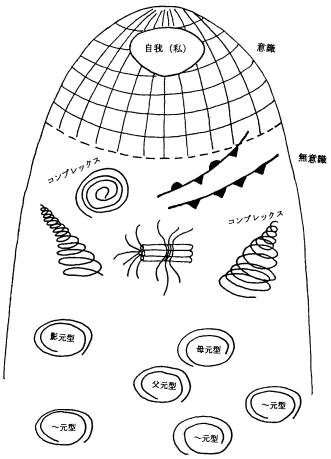
今月は放送大学の教科書を熱心に二回も読んだので、それについて書いてお茶を濁したいと思います(^_^;)。

2003 年度からの放送大学新設科目「ユング心理学」。おぉ待ってましたって感じで飛びつきました。とは言っても、学生にはならず教科書だけ買ってラジオを聴くという、お金の掛らない受講生です。試験がないということで勉強するもしないも自分次第。どうなることかと思っていましたが、興味があれば試験があるないなんて関係ないということがよ～くわかりました。前に受講した「ギリシャ哲学」は教科書をただ読み上げるというふうでしたが、この授業では受講生は教科書を読んでいることを前提にし、教科書を補完するという形で行われます。また講師である大場登さんの授業は、「自分の目を通したユング心理学」であることを学生に伝え、姿が見えなくとも語り手が聞き手に押し付けるだけの授業にならないような配慮が感じられるものです。今現在４回の講座が終わりＧＷ開けに５回目の授業が再び開始される予定です。

今年度の新設科目は興味をひくものが多く、「精神分析学入門（フロイト関係)」「臨床心理面接持論－心理療法の世界」や哲学では「ヘーゲルを読む」など、時間と頭に余裕があれば全部受講したいほどでした。わたしの場合はただただ人間の心（大部分は自分自身）の未知なる部分への興味があるだけなので、ユング心理学についても実は茫洋とした憧れがあるだけです。その憧れを引き金にぽつぽつと勉強していけたらいいなと思っています。

ユング心理学　－夢・神話・昔話・イメージと心理療法－

大場　登　　放送大学教育振興会発行



ユング心理学では、まず人間の心が意識と無意識というふたつの領域から構成されていることを基本的に仮定している。フロイトと訣別した 1912 年頃ユングの心には次々と様々な夢や空想が立ち現れる。彼は無意識の衝動に自分を意識的に委ね、現れるイメージの意味を問い続け、圧倒的な無意識的情動に飲み込まれる危険と隣り合わせにいながら、その苦しい対決から生じてくる倫理的責任を自ら引き受ける決意をして事に挑む。襲ってくるイメージ＝幻覚とは心を病んだ人々の世界のものであるとも言えるし、いわゆる「超常現象」と表現されうる数多くの経験も報告している。一般に「病的」「非科学的」と評されがちな現象も無視することなく、それらを人間の心ないし宇宙には「存在しうること」として見つめていく。これこそがユング心理学の基本姿勢であると本書は語っている。

古代ギリシャにおいて哲学はほんの一握りのプラトンのような傑出した学者のものだったという。けれど現代においては「自分探し」という言葉が流行語のように使われ、人々は「癒し」を求め、安らげる場所を探す。多くの人たちが哲学者であり、心理学者であるのだろう。それだけ現代社会というのは、自分自身をたやすく見失ってしまう要素に満ちているのかもしれない。心の大部分を占めるという無意識領域。自分の心の奥底を掘って掘って行った先には何があるのだろうか。